

出穂期におけるもみ枯れ細菌病について

1 発生条件について

(1) 出穂期に最低気温 24℃以上で雨があれば発生しやすい

今年は7/29、8/3、8/9、8/11, 12 と夕立などがあり、発生条件は揃ってます。

(2) 購入もみか自家採種？

種子伝染するので、自家採種なら持ち込みの可能性大です。乾もみでも1年は生存します。

また、保菌してそのまま生育していたら、止葉の葉鞘にも病斑を作るので、そこからもみと接触して感染します。

(3) 生態

もみと被害わらが伝染源で、乾燥・低温でも長期間生存し、被害わらがそのまま次年度の感染源となります。

2 被害はどうなるか

ちょうど今の時期は穂も緑で一番目立ちやすくなっています。感染時期はほとんど出穂後4日まで（細菌が入り込みやすい時期）なので、この後頻繁な夕立などがなければ広がらずに止まるでしょう。またもみが登熟で黄色くなってくるとそんなに目立たなくなると思います。

減収について、開花時によつぽど好条件でない限り、そんなに（共済に引かかるくらいには）ないと思われます。

3 防除法

出穂期で発症したら、薬剤では抑えきれないと思われます。細菌病なのでなかなか薬剤がありません。

基幹防除でもこの病気に登録はないのですが、ウンカ類の防除もいるので、基幹防除されていない一般田でしたら防除をお願いします。

その他の耕種的防除ですが、被害わらを焼却する、自家採種はやめる。

4 内穎褐変病との違い

発生の気象条件は大体一緒で、どちらも細菌ですが、内穎褐変はもみの半分だけ褐変し（たまに外も少し色が変わる）、もみ以外にもどこでもいる常在菌です。どちらも発症してからは薬はあまり効果がありません。

